

## 【研修報告】

# 「The 5<sup>th</sup> Research Conference of World Society of Disaster Nursing October 18-19, 2018」への参加報告

中 信 利恵子\*

## はじめに

第5回世界災害看護学会（The 5th Research Conference of World Society of Disaster Nursing, Bremen, Germany 2018）が、2018年10月18日、19日の2日間にわたり、ドイツのブレーメンで開催された。本学会の大会は2年に1度開催される。第5回の大会長はブレーメン大学のステファン・ゴレス教授で、大会テーマは「Future Challenges for Global Disaster Risk Management - Evidence based Research and Powerful Competencies Needed for Nurses（地球規模の災害リスク管理に対する挑戦—証拠に基づいた研究と看護師に求められる強力な能力—）」であった。参加者は170名以上、16ヵ国4つの地域からの参加があった。本稿では、本大会の概要の紹介と筆者の発表内容について述べる。

## 1. 学会の概要

はじめに、オープニングセレモニーとしてブレーメン芸術大学の音楽家による演奏が行われた（写真1）。本学会において、世界災害看護学会の会長および第5回大会長による講演、「Disaster nursing and emergency preparedness（第4版）」を発刊された編集者のテナー・グッドウィン・ベーネマ教授

の講演、3つのパネルディスカッション、最新のトピックスをふまえた災害看護のスペシャリストによる講義等が行われた。また、38件の口演発表と70件の示説発表が行われた。ランチタイムやコーヒブレイクは隣室で立食形式であり、ドイツの看護師の方、韓国の方など他国の参加者と丸テーブルで話す機会が自然にできて、交流の機会が持てた。1日目のセッション後には、ブレーメン市のシティガイドツアーが企画されていた。いくつかのグループに分かれて、現地の方による案内で学会会場から徒歩でブレーメンの街を散策した。ブレーメンはグリム童話で「ブレーメンの音楽隊」が有名であり、マルクト広場の隅にロバ、犬、猫、鶏の銅像があり、ロバの足を触って願い事をすると言われている。街は新興地域と、古くからある建物が現存する地域があり、お店やホテルとして継続的に利用されていた。車が通れないほどの細い路地が続いており、美しい街並みであった（写真2）。街を散策後に、ブレーメン芸術大学の音楽家による合唱のパフォーマンスを堪能した。地元の人々が一緒に会場に入場されて



写真1 オープニングセレモニーの様子



写真2 ブレーメンの街並み

\* 日本赤十字広島看護大学

おり、気軽に音楽を聴きにいられていた印象であった。その後のパーティでも音楽演奏が披露され、生活の一部としてクラシック音楽が浸透していることを実感した。今後の世界災害看護学会は、2020年に韓国、2022年に台湾での開催が予定されている。

## 2. 筆者の発表内容

筆者は「Identifying the meanings of disaster relief nurses' experiences in disaster nursing, depending on the difference in educational background」というテーマで示説発表を行った(写真3)。前回調査では、赤十字病院で勤務する看護者を対象として質問紙調査を行った。今回は、看護者の教育的背景の違いによって、看護者の災害看護体験の意味づけと看護者が認識した経験に差があるかを明らかにすることを目的として研究を実施した。過去約10年間に災害看護活動を行った経験のある看護者を対象者とした。赤十字病院36施設に882部、赤十字以外の災害拠点病院38施設に252部質問紙を郵送し、回収率59.8% (678部)、有効回答率

99.7% (676部)であった。赤十字教育施設出身者(以下、赤十字出身者と略す)が122名(17.8%)、赤十字以外の教育施設出身者(以下、他施設出身者と略す)が554名(80.9%)であった。赤十字出身者と他施設出身者との間で比較を行った。5段階尺度(-2~2)を用いた。看護者の災害看護の体験の意味づけ(5項目)のうち次の2項目の平均値が1以上(高かった)でばらつきが少なかった。「災害看護の使命感が湧く体験だった(M:1.07, SD:0.87)」,「自分の知識・技術を高めようという向上心を刺激する体験だった(M:1.01, SD:0.90)」。平均値に差があり、ばらつきがある項目は、「現在、災害看護活動が十分にできなかった、情けない思いがある(p<.05)」で赤十字出身者(M:-0.52)、他施設出身者(M:-0.26)であった。前回調査と比較した結果、平均値が高い項目がほぼ一致しており、同様の結果を示していた。看護者は災害看護活動において、使命感や向上心への刺激を受ける体験をし、肯定的な意味づけをしていた。他施設出身者の方が、活動が十分にできず情けない思いをした看護者がいた傾向が考えられた。



写真3 ポスター発表

## おわりに

今回、第5回世界災害看護学会(2018年)に参加して、他国の方々と交流する機会を得ることができた。災害看護は国際社会においても重要な役割を果たしていく必要があることを改めて実感した。そして、多様な視点で見ていく、視野を拓けていくという点において、文化の異なる人々と交流することがとても重要である。今後の研究・教育活動に活かしていきたい。

## 謝 辞

本学会への参加は、日本赤十字広島看護大学海外出張旅費助成を受けて行いました。このような貴重な機会を与えてくださいました本大学および関係者の皆様に深く感謝いたします。